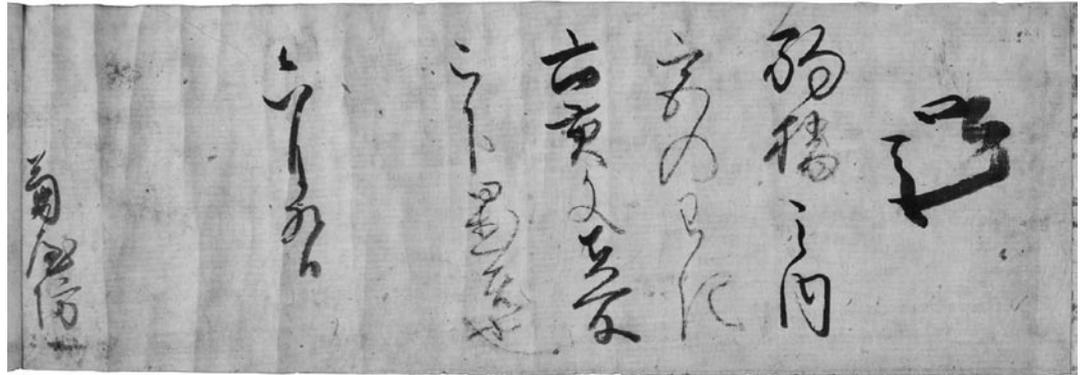


富士山あれこれ



■武田信虎判物

武田信虎判物 (上吉田-秋山家文書)

富士吉田市では、1979年～2001年にかけて市史の編さんに取り組みました。この事業は、『富士吉田市史』(全12巻)の刊行に結実したわけですが、その後も当館では、市内各所に伝わる歴史資料の調査を続けています。そうしたなか、去る6月から実施した上吉田の秋山家(菊谷)の調査では、武田信虎の古文書の伝存が確認されました。戦国時代の古文書にかかわる調査は、江戸時代から幾度となく繰り返されてきました。ここに紹介する古文書につきましても、元文年間(1736～41)に甘藷栽培の奨励で知られる青木昆陽により、精巧な写が作られています(国立公文書館蔵「諸州古文書」)。『富士吉田市史』史料編第2巻は、別の旧家に伝わった写の写真を掲載するとともに、文面を活字化していますが(267頁)、今回その原本が確認されたわけです。武田信虎の発給文書は、写を含めても40点ほどしか知られていません。加えて、紙質や墨色、筆勢などにかかわる情報は、原本によらねば得ることができません。きわめて重要な「再発見」であったと考えます。

改めて申すまでもなく、上吉田は富士山登拝の拠点で、同所には道者の信仰を助けた御師の宿坊が軒を連ね、19世紀前半には86軒余を数えたといえます(『甲斐国志』巻18)。本文書を伝えたのは、こうした御師の一軒で、屋号を「菊屋」といいます。江戸時代の御師は、官途や受領を称することが多く、菊屋の当主も代々「豊後守」を用いてきました。「田辺豊後」あるいは「菊屋豊後」の名が、江戸時代の古文書に散見されます。

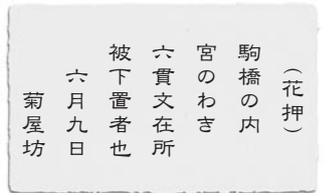
写真に掲げましたように、文書は卷子に仕立てられています。袖(文書の右方)には、武田信玄の父信虎の花押が据えられています。したがって、「武田信虎判物」と呼ぶのが適当でしょう。

信虎は、明応3年(1494)正月に信繩の長男として生まれ(『甲斐国志』巻94)、永正4年(1507)2月には、父の死没にともない、14歳の若さで武田家の家督を継いでいます。周知のように、天文10年(1541)6月に信玄(当時は晴信)のクーデターにより放逐されていますから、35年間にわたって武田家の当主の座にあったこととなります。初めは信直と名乗

り、後に信虎と改めました。同人は、永正18年(1521)の4月に従五位上左京大夫に叙任されていて(『後柏原天皇日記』「歴名土代」『山梨県史』資料編6下)、改名の時期もこのころと考えられています(『山梨県史』通史編2)。

文書に戻りましょう。「六月九日」とあるのみで、年紀を欠いています。実は信直・信虎の文書の過半は、月日のみの記載なのです。近況や要件を報じる書状(手紙)でしたらいざ知らず、本文書のように権利を付与し、後代にまで効力をもたせようとする文書でさえ、年紀を記さないことが少なくありません。子の信玄や孫の勝頼の発給文書が、一般に年紀をとまなうとは大きく異なるところで、信虎の発給文書の特徴のひとつと考えてよいのかもしれませんが。

では、いつごろのものでしょうか。手がかりとなりうるのが花押です。同人は、信直・信虎それぞれの時期に、各2種類の花押を用いたことが確認されています。ただし、信直の第2種と信虎の第1種は近似していますから、これらを3種に大別することも可能です(『山梨県



史』資料編4・別冊写真集 264頁参照)。本文書に使用されているのは、信虎時代の第2種ですが、その第1種は無年紀文書にしか使用例がなく、この第2種も年紀を明記する使用例は、①大永6年(1526)、②享祿2年(1529)の2例にとどまります(甲州市・向嶽寺文書、笛吹市・称願寺文書)。第2種の使用開始年代を特定することは、正直困難です。ただ、天文年間(1532～55)に入ると、花押を朱印や黒印で代用するようになること(判子を捺した文書が増える)、本文書の花押の形状が①より②に似ることから、ここでは享祿年間(1528～32)から天文初年ころのものと考えておきたいと思います。

次号では、本文わずか18文字のこの文書から何が読み取れるのか、皆さんと考えると同時に、合せて伝わった江戸時代の古文書から、この文書の歴史に触れてみたいと思います。

(博物館協議会委員 堀内 亨)

富士山御師外川家に泊まった人々(後-2)

—『富士の道の記』の紹介—

菊池 邦彦(外川家調査員/東京都立航空工業高等専門学校教授)

七合五勺から頂上

時は江戸時代も終わりに近い、12代将軍徳川家慶のころのことです。

天保14年(1843)7月13日(太陽暦8月8日)の早朝、上吉田のマチの東側、富士山の御師外川能登守宅(現在、御師旧外川家住宅として公開)を早朝に出発した一行は、富士山山麓のお胎内や五合目の小御岳に寄り、

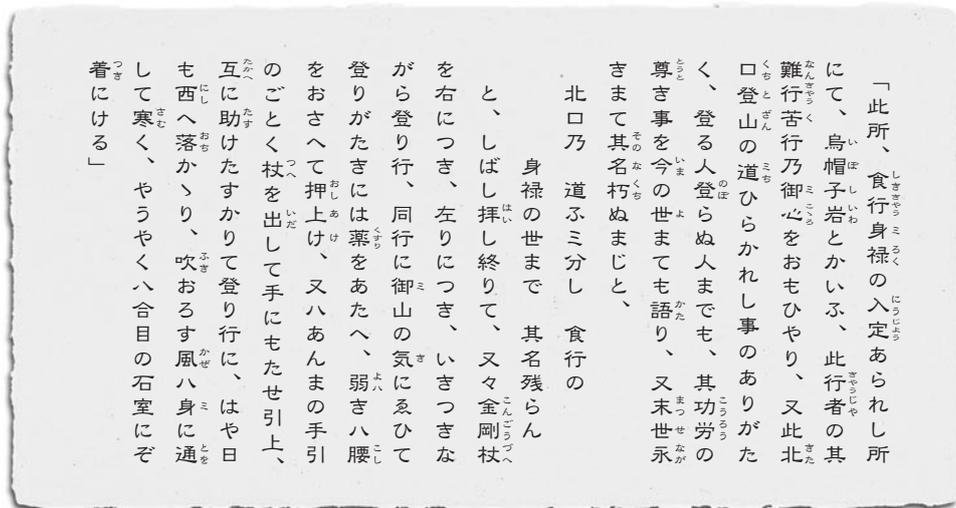
七合目で山頂から吹き降ろす寒風に震えながら、ようやく七合五勺にたどり着きました。

富士山信仰に関心を持つ人ならばだれでも、北口登山道の七合五勺が、富士講の人々にとって、どのように重要な意味を持っているのか、ご存知でしょう。

江戸時代の中頃、8代将軍吉宗の時代、享保18年(1733)6

月から7月にかけて、江戸の富士の行者食行身禄が断食入定したのがこの場所です。身禄は当初富士山頂での入定を考えていたと言われていますが、頂上を管轄する駿河国大宮の浅間神社の関係者がこれを嫌って追い立て、たどり着いたのが、ここ七合五勺の烏帽子岩という大岩でした。身禄は享保飢饉などの

当時の世相を批判し、入定を決意したようです。このことから、後に富士講の人々によって中興の祖といわれるようになってゆきます。その身禄の入定の地ですから、いわば、富士講の聖地とも評すべき場所です〔新田次郎さんの『富士に死す』など、身禄を取りあげた作品もあります〕。



■史料1

この所〔七合五勺〕は、食行身禄の入定なされた場所で、烏帽子岩という所です。〔私たちは身禄〕行者の難行苦行の御心に思いを致し、また、この北口登山道を開かれた〔富士講の登山道となる元となったということでしょうか〕ことが有り難く、この道を登る人も登らぬ人も〔誰もが〕、その偉業をみとめ、今の世は勿論、末世までも、その名は永遠に不滅です。

北口登山道を踏み分けて〔開いた〕食行身禄様は、〔釈迦入滅後、56億7千万年後に現れるという〕身禄〔弥勒菩薩〕の世までも、その名が残ることでしよう、

と、烏帽子岩を拝し終わって、また金剛杖を左右に突き、息を切らしながら登ってゆきます〔富士講に興味をお持ちの方は、もう少し、この烏帽子岩あたりの描写を詳しく知りたいと思っておられるでしょうが、作者は実にあっさりとしています〕。

「御山の氣に糸(酔)ひて登りがたき」〔高山病〕になった同行には薬を与え、〔身体の〕弱い者は腰を押し上げるなど手助けをし、または按摩の手引きのように杖に捕まらせて引き上げ、互いに助け合って登ってゆきます。

はや太陽は西へ沈みかかり、山頂から吹き降ろす風は寒さを増します。〔そうこうするうち

に、〕ようやく八合目の岩室に着きました。



■烏帽子岩

富士山御師外川家に泊まった人々(後-2) - 『富士の道の記』の紹介-

岩室の夜〔布団に入る迄〕

「爰まで八是甲州にて、是より頂上ハ駿河なり、東西是を見通して境也とかや、

苦難して 登る甲斐あるハ合目 残り二合に 駿河富士嶺
 となん言つゝ、互に無事を祝し合、岩道・砂道にあれば、
 足のよごれぬはよけれども、又足すゞ木なきもうし、わら
 くつ取しまゝに筵畳へ打上り、切爐のはしへ居よりつゝ、寒
 さを凌ぎやうくとして人心地付、顔の色さへつやしく
 なりけれバ、瓢の焼酎取出し、兼て用意の梅干に佐野、同者
 を相手に一瓢の底をたゞきけれバ、ほろ酔して寒さもいづく
 へかさりなんと思われ、はや日も暮過て、戌頃おひなりけれ
 バ、十三日の月の巳の時計りに昇りしを、詠(眺)めん窓の
 なかりせば、外に出て詠(眺)れハ、吹下す風に焼酎の香をう
 ばハれん事をいとひて、空敷室にかゞまり居るそ本意なくて、
 木の影も 村雲もなく てる月を

こゝろに詠(眺)む 富士の岩室
 風のくもりに 詠(眺)めぬぞうき

吹下るす 富士の岩家の風寒し 照月影を 雪かどぞ見る
 なと口すさみぬ、又武士の二人り連ハ帯刀のひかりにや銭
 のひかりにや、室のうちの奥まりたる小高き所に琉球表の畳
 敷はめたる小座敷に、綿入さへもあかなきを着て、ふとん
 に座し酒のミてありつゝ、「先達く」と我をまねきけれバ、
 「ア、」と答へて行けれバ、むりに同座をさせ、今日の労を
 ねぎらひ、「又明日の登から下り迄を道引して頼たし、我々
 八府中の社に仕へるもの也」と、流石は武家のいんぎんに、
 しかつべらしくのべられて、たゞ「ハイく」とかいるのご
 とくつくばへバ、「左にて互に必置あり、ひらにく」と
 いへつゝも、猪口を廻せば引受て、まだ焼酎の香もとれづ、
 程よく呑終れバ、「はやぞうすいの出来しぞ」と、茶碗にモ
 りて持出せば、てんでに取つゝ吹ながら食終り、「はや寝ま
 らん」と、ふとん一つをかり取て、拍餅のごとくして、思ひ
 くゝに寝まりけり、

■史料2

さて、岩室の中はどうなっているのでしょうか。

〔岩室の主人から聞いたのでしょうか〕ここ八合目までは甲州〔甲斐国〕ですが、これから頂上迄は駿河国です。〔八合目の〕東西を見通して境としているようです。

苦勞しても登る甲斐がある〔甲斐国=山梨県の名称と掛けています、甲州側の〕八合目までですが、残り二合は駿河国(静岡県)分の富士の嶺であることだ、

と言いながら、一行は互に無事を祝い合います。途中は岩道・砂道なので、足が汚れないのはよいことですが、一方、足をすすぐ水がないのは困ります。藁ぐつ〔ワラジ〕を脱いで、そのまま筵畳へ上がり、切爐の端へ座り込みます。〔これで〕寒さが凌げます。ようやく人心地

ついて、一行の人々の顔の色もつやつやしてきました。

作者は秘蔵の瓢箪に入った焼酎〔「菊」と名付けて愛飲していました、その後、上吉田のマチで補充しています〕を取出し、兼て用意の梅干を肴に、佐野の富士講の同者〔道者〕を相手に、瓢箪の底をたたく程〔にすべて呑んでしまいました〕。〔おかげで〕ほろ酔気分になり、寒さもどこかに吹っ飛んでしまったようです。

はや日暮れ過ぎて、戌の刻〔夜8時〕ころです。十三夜の月が巳の時〔午前10時〕ころに昇っているはずなので、〔本当はそれを見たいのですが、岩室には〕眺める窓がありません。外に出ると、吹き降ろす寒風で折角の焼酎の酔いが覚めてしまうので、不本意ながら空しく岩室の囲炉裏端にかがまっている

ので〔次のように詠んでみました〕、

富士山八合目の岩室〔の外に出れば、きっと邪魔をする〕木の影も村雲もなく、十三夜の明るい月を眺めることが出来るでしょうが、〔外の寒い風で折角の酔いが覚めてしまうだろうから〕、〔今晚は〕心〔の中の月〕を眺めることにしました〔作者は、この作品中でよく「眺める」と書くべきところを「詠める」と書いていますが、ここでは、眺める代わりに歌を詠んだ、ともいえましよう〕、

富士山八合目の岩室〔の外に出られれば、きっと〕木の影も村雲もなく、十三夜の明るい月を眺めることが出来るでしょうが、〔今晚は〕寒い風〔が雲の代わりに邪魔をするの〕で眺めることが出来ないのが残念です、〔山頂から〕吹下ろす富士の

風があまりにも寒い岩屋にいるので、照る月影を雪かと思誤ってしまいました、

などと口ずさんでみました。また、武士の二人連れは、帯刀のひかり〔威光〕か、それとも銭のひかり〔威光〕か、岩室のうち奥まった少し小高い場所に、琉球表の畳を敷きつめた小座敷があり、そこで〔我々とは違って〕垢のついていない〔パリッとした〕綿入を着て、布団に坐って酒を呑んでいます。

〔すると私に気がついて、〕「先達へ」と私を呼ぶので、「ア、」と答えて〔近くに〕行くと、無理に並んで坐らせ、今日の労をねぎらい、「また明日の〔山頂への〕登りから下山迄、〔我々の〕導きを何とかお頼みしたい。我々は、実は府中〔東京都府中市〕の神社に仕える者でござる」と、流石に武家らし

く慇懃な挨拶です。[そんなに]しかつめらしく挨拶されても、こちらはただ「へいへ」と蛙の様に這い蹲るのみです。「それでは、お互いに心おきなく[お付き合い]でき申さん。ひらにへ」と言われますが、相手から猪口が廻ってくれば引受て、まだ焼酎の香も無くならず、程よく呑み終わりました。

この、神社に仕える武家というのはどのような身分でしょうか。当時、神主や社人は苗字帯刀が許されていたようですし、

大きな寺院には寺侍がいましたので、それに類する神社に属する侍といったところでしょうか。府中の神社とは、武蔵国府跡に建つ大國玉神社がまず思い浮かびます。その社人または関係者でしょうか。

「もう、雑炊ができましたよ」と、[岩室の主が]茶碗に盛りつけて持出すので、てんでに取り持って[熱いのでフーフーと]吹きながら食べ終わると、「もう、寝ましょう」と、布団一つを借りて、柏餅のように[丸め

た布団に挟まって]、思い思いに寝つきました。



■岩室 / 「富士山道しるべ」

岩室の朝 [起床から出発まで]

「や、眠らんとするに、社家衆のうち一人り酒にゑひしか、御山にゑひしか、やまふてうめく声のするを、うとりく」と聞居るに、「先達葉やあらん」といふ、いかにせませしや、用意の消毒丸あり、「是用ひ給へ」と二粒計りやりけれバ、「こハ忝し」と用ひぬるに、しばらくして其うめく声の止ミけれど、はや酒の氣ハさめ、寒き事雪中にふすごとく、戸のすきも風ハゑり元より入てたへがたく、ねむり付人のいびきハ耳元にかしましく、まじりくとして、まだ短夜のたけ安く丑の半ばとも思ふ頃、室の主ハ起出て、火などたき付米かしくに、いよく寒さねもやらぬ故、起出つ、爐の元へ居より寒さをやうくしのぎけり、そちこちするうち、飯も出来、又人の持来れる餅を汁煮して同行の人々を起し廻りけれバ、ミなく起出、我もてうづを遣ハんとすれバ、主のいへて「此両三日ハ雪の解やらで、水の不自由なり、心して遣ひ給へ」といへけれバ、小やかんの水一掬に口す、ぎ手あらひて、神を拝し、かの餅を喰せば、かたくしてなき歯にてハ喰がたければ、鞆の魚のむごとくして、やうく喰仕舞、はや十四日の東雲近くなりぬれば、「いざや登らん」といへぬるに、此二人りなる社家衆ハ病いまた癒やらで、「跡より登るべし、先へ登り給へ」と言にまかせ、氣のどくなから残し置、佐野の五人ともる共に、案内を先だて登りに、」

■史料3

ちょうど[作者が]眠りにつこうとしていると、先ほどの社家衆[2人の武士]のうちの1人が、お酒に酔ったのでしょうか、それともお山に酔った[高山病にかかった]ためでしょうか、病気で呻くような声をあげました。それをウトウトしながら聞いていると、[急に]「先達、[なにか]葉はござらんか」と言い出します。どうしたものだろうかと[思案している]と、あらかじめ用意していた消毒丸

があるのを思い出しました。

「これをお飲みください」と、2顆ばかり渡すと、「これはかたじけないと、[早速]飲んだようです。[その薬のせいかわかりませんが]しばらくするとその呻き声はやみましたが、[私のほうは]お酒の効き目が失せ、その寒いことと言ったら、雪の中に寝ているようです。[岩室の]戸の隙間から入ってくる風は、襟元から容赦なく吹き込んできて[体を凍えさ

せ]耐え難いほどですし、[隣で熟睡している]人の躰は[ゴーカーと]耳元でうるさくてたまりません[山小屋ですから、布団は密集して敷いてあります。そのうるささと言ったら、職場の泊りがけの旅で同室の人の躰に参った、という比ではないでしょう。夜中に目を覚ましやすい私などは、まったくこの作者に同情してしまいます]。

まじまじとして[寝付かれませんが]、夏の短い夜ですがま

だ夜は長く、丑の半ば[午前2時]頃です。ところが、岩室[山小屋]の主人はもう起きだして火をおこし、ご飯を炊きだします。いよいよ寒さで寝付かれなくなったので、[作者は一人]起きだして囲炉裏の近くににじり寄り、ようやく暖をとりました。そうこうするうちに朝飯も炊き上がり、やがてみんなの持ってきた餅を煮汁の中に入れて[朝食の用意が整ったので]、同行の人々を起こして廻ると、

富士山御師外川家に泊まった人々(後-2) - 『富士の道の記』の紹介 -

みんな起きだして来ます。私が、手水を使おうとすると、主人いわく、「ここ二、三日は雪が解けないので、水が不自由です。大事に使ってください。」と言うので、小さな薬缶の水を一滴口に入れ、それですすぎ手洗いをして〔身を清め、それぞれ

の岩室には神仏が祀られていますので〕神を拝します。一方、餅を入れた煮汁を飲んでみようと、餅は固くて、〔私のように〕歯のあまりない者にはとても噛めたものではありません。仕方なく鵜が魚を呑み込むように〔丸呑みに〕して、ようやく食事を

終えました。〔そのころには、もう日が改まって7月〕14日の東雲〔明け方〕近くなっていますので、「サア、登りましょう」と声をかけると、先の2人の社家衆〔2人の武士〕はまだ具合が悪い様子で、「後から登るので、先に登ってくだされ

と言うので、気の毒だけれど八合目の小屋に残して、佐野の富士講の5人と一緒に、案内人〔あとでわかりますが、強力2人のことをこう呼んでいます〕を先頭に、〔いよいよ頂上を目指して〕登り始めます。

八合目から頂上へ

「寒風肌へに染ワたり、手足ハござへて
持杖は我として其有事を覚へず、右に持て
左りを懐にし、左りに持て右をあたくめ、
はや東雲の白くとしらミワたりし景色ハ
気候たがへど、又秋乃心とや思われ、
置所もなけれと露の薫りかな
とく文字重ねしごとくなる、焼山石の造
り道を登り行バ、九合目に近き大岩をかた
どり日の出を拝せんとししばし東を向ひて休
らひ、右を望めハ谷間に雪の白くと有、
是はかこへ置雪にて、山中茶屋く是を解
し遣ひ水に用ひるとかや、又左りの谷く
ハかこへるにはあらねども、二筋三筋して
残りあり、しばらくして旭の横雲されて昇
れるを眼下に、ミなく数珠すり立て拝し
けるぞありがたし、
何もなき 富士の御山の絶頂に
拝す朝日を 眼の下に見て
と、もつたいなくも昇る朝日を跡になし、
かけ念仏のくもりなき声もる共にに登り行
ハ、はや九合目の岩室にやうくとして登
り着、焚火に手足をあたくめなどして、又
御肉といひて蘇鉄のごとくしてちいさきも
の、「是、此御山の名産にて、諸病を治す
る良薬」と、室の主のいふにまかせ、ミナ
くとのへ懐して、又もる共に登り行、
爰らより八御山も又一さわ陰阻なれば、す
こし登りて腰をのし、又登りて八足を休め
つ、御頂上大日堂の前へ出けるぞありか
たし、」

■史料4

〔富士の山腹に沿って吹きおろす〕寒風は、いかにも肌染みわたり、手足は凍えて、持つ杖も〔果たして持っているのか〕自分ではその有ることが分からないほどです。右手に持って左手を懐にし〔て温め〕、左手に持ちかえて右手を温め、そうこうしているうちに、はや東雲〔明け方〕の空は白々としらみわたり、景色は気候が違いますが、又、秋の心〔秋になって寂しく物悲しい様子〕と思われま

そこで、
〔露がおりる、そんな露を〕置く所もないけれど、〔この景色からは〕露の薫りがすることだ

な、
〔などと〕素早く文字を重ね

て、〔俳句をよむ、そのままの〕景色です。焼山石〔溶岩の赤黒い石のことでしょうか、富士山は木山・草山・焼山と、山中を3区分していますので、焼山でよく見かける石、というぐらいのことでしょう〕で造った道を登って行くと、九合目に近いところに大岩があり、そこに控えて日の出を拝もうと、しばし東に向って休んでいると、右手の谷間には雪が白々と残っています。これは特に囲い置いている雪で、山中の茶屋〔客商売をしている岩室でしょう〕が、これを溶かして生活用水として使っているそうです。又、左の谷には、囲ってはいませんが、二筋・三筋と雪が残っている場所があ

ります。

しばらくすると、朝日の横の雲が切れて、昇る旭を眼下に見ることができるようになりました。〔同行の者が、この朝日に向かって〕皆々数珠をすりたて、首を垂れる様は、実に有難いものです。

何もない〔富士講のお歌に、「ふじの山のほりてみれば なにもなし 云々」とあるのを踏まえているのでしょう〕富士の御山の絶頂ではあるけれど、〔そこは〕眼下に朝日を拝すことができる場所であることだ

と、勿体ないことに、昇る朝日を背にして、〔心に〕くもりなき声で〔一心に〕掛け念仏を唱えながら登って行きますと、はや

九合目の岩室に登り着きました。

そこで焚火に手足を温めなどしていると、また、岩室の主人が「御肉」という小さな蘇鉄のようなものを持ち出してきて、「これはこの御山の名産で、諸病を治す良薬ですよ」と言うので、皆々その言葉を信じて買い込み、懐にしまっています。

〔九合目で少し休んで、〕また、一行は登って行きます。ここら辺りから、御山はまたひときわ陰阻で、少し登っては腰を伸ばし、また登っては足を休めながら、〔ひたすら登って行きますと、やがて〕有難いことに、御頂上大日堂〔北口から登ると、薬師岳のあたりに出るはずです〕の前へ出ます。

頂上の風景① 大日堂から宝永山まで

「露もなく 雲の香もなき 富士の山

苦もなく登り 来ぬる頂上

と言つゝ、しばし大日堂を拝し、夫より御頂上

石室茶屋へ立寄、まづは同行つゝ、がなきを祝し、

三国一のひと夜酒を水鼻もる共呑もあり、萩餅・

焼酎のミ喰ふありて程よく休らへたらば、「御頂

上廻らん」と案内を先に立て行バ、御穴のぎわに

風よけなりと五、六尺の木のわくして石を積て長

サ七、八間、此所補理科老人毎十二穴を出し、穴

ぎわにしばし御歌を上てぬかづきぬ、今朝ハめづ

らかなる晴天にて、一天に塵程の雲さへなく、北

を望め八甲陽の山々峯々は眼の先に有て、信野

(濃)なる浅間山さへ煙りかすかにミヘワたり、

下毛の黒髪山のくるくると毛筋引たるごとくなる

霞のあへののぞミ、筑波ハはなれて彼山にちやと

うたかひ、東ハ大山・箱根・足柄山さへ手に取ご

とくにして、吉田の森を初め須走のはしり道、須

山口ハ足の先に見下し、我東都ハ日の昇り行あた

りかと指ざし、其外山中・川口の湖を初、御山の

八湖、丸き有、長き有、色々の形して白く」とミ

へ、誠に其景様言葉に述るにかたし、案内のもの

いひて「かく御山の晴ワたる事御山開より閉るま

で三五度ならでハなきに、是にあたる同行こそ、

誠ニさちなり」となん、我も左思ひるといへて、

あなたとふと 富士の御山の 絶上に

雲きり晴て 見ゆるハ湖

と祝して、夫より弓手へ少し下り、小峠通りを

東へ廻れば、いにし宝永の年、御山の焼し時生れ

出たる宝永山を眼下にミなし、此山ハ今に晴る事

まれなるに、けふまたかく晴ワたりし事のありが

■史料5

〔日の光を反射して湖面が〕白々と見え、誠にその風景の様は言葉に言い表しがたいものです。案内の強力が言うには、「このように御山が晴れ渡ることは、御山開きから山仕舞いまで〔の2か月間〕に三度か、五度〔数度〕しかないのに、これにあたった同行のみなさんこそは、本当に幸運ですね」と〔のことでした〕。私もそのように思いますので、

〔今日は〕なんと尊い〔日でありましょうか〕、富士山絶頂の雲・霧が一切晴れて、〔眼下に、あの有名な富士〕八湖がはっきりと見えるのですから、

と祝して〔一句詠んでみました〕。それから弓手〔左手〕へ少し下り、小さな峠の通りを東へ廻り込みますと、かつて宝永年間〔1704～11〕の御山焼けの時〔宝永4年=1707年12月〕生れ出た宝永山が眼下に見えます。この山は、現在も晴れることが稀ですが、今日はまたこのように晴わたって、実に有難いことです。

こう呼んでいます〕の際に風よけとして5、6尺〔1尺≒30.3cmですから、人の身長くらいの長さです〕の木の棒で石を積んで、長サ7、8間〔1間=6尺≒1.8mとすると、12.6～14.4mくらいでしょうか、石垣状に囲ったところがあって、そこが火口に向かって御歌と呼ばれる富士講の様々な唱えごとをあげるのに丁度良いように作られていたのでしょう〕、この所の補修・維持費として1人12穴(=12文、穴は寛永通宝の四角い穴を指しています)を出し、富士山頂の火口のきわで、しばし一行は座り込んで拝礼し、〔富士講の〕御歌をあげました。

今朝は珍しい快晴で、空を見渡しても塵ほどの雲さえありません。北を望めば甲陽〔山梨県〕の山々峯々が眼の前にあり、信濃国(長野県)の浅間山さへ、その煙がかすかに見えます。下毛〔=下野、群馬県〕の黒髪山の〔文字通り〕黒々と毛筋を引いたような姿が、霞の間に望めます。一

方、そこから少し離れた山が筑波山ではないでしょうか。東は〔相模国=神奈川県〕大山・箱根・足柄山さへ手に取るように〔はっきりと見えます〕。〔富士山北麓の〕吉田の諏訪の森を初め、〔富士山東口にあたる駿河国の〕須走のはしり道〔火山灰が厚く積もった道で、草鞋を2枚も3枚も重ねて履いて一気に走り下ります〕、〔富士山東南の信仰登山口集落である〕須山口は足の先に見下し〔た所にあり〕、我が東都〔お江戸〕は日が昇ってくるあたりかと指さし〔て、口々に言い合います〕。その外、山中・川口の湖を初め、御山の八湖〔富士講の修行の地としてあげられている水行をおこなう富士山麓の8つの湖で、内八海と呼ばれる明見湖・山中湖・川口湖・西湖・精進湖・本栖湖・西尾連湖・泉津です。この他に、明見湖と泉津を除き、代わりに駿河国の須津(須戸)湖・神奈川県芦ノ湖を入れる場合もあります〕を見ると、丸いや、細長いや、色々の形で

富士山頂の様子は、好天に恵まれ、作者も生き生きとたくさん書いていますので、便宜上大きく3つに分けました。

露〔に足を滑らすこと〕もなく、霧(霧)〔がたちこめてその香〔で道に迷って途方に暮れること〕もなく、富士の山の頂上に、苦もなく登って来たことであるなあ〔実際は、これまでの記述にあるように、大変な苦勞をしたのですが〕、

と言いながら、しばし大日堂に拝礼し、それから御頂上の石室茶屋へ立寄って、まずは同行〔6人〕が恙なく登頂できたことを祝い合いました。名物の三国一の一夜酒〔富士山が三国第一の山ですから、その名物も三国一です〕を鼻水をすすりながら呑む者もいれば、萩餅と焼酎を飲み食いする者もいて、ここで程よく休みました。「〔さあ、〕これから頂上を一周廻りましょう」と案内〔2人の強力のことです〕を先に立てて行くと、御穴〔作者は、頂上の噴火口のことを

富士山御師外川家に泊まった人々(後-2) - 『富士の道の記』の紹介 -

頂上の風景② 胸突きから内浜通りまで

「夫より御むな付といへる所をはしごにて登り、御穴のはしへ出、しばし南へ過、さるの河原へ出づ、此ところ広くと平地にちいさき石もて、こゝかしこに積て石塔の形す、此所表山にして、左り八足高山、伊豆の山々八海面へのり出し、大島・小島・三宅・八丈の島々ハ海面に浮しごとく、沖を乗行帆掛船は白くとして伊豆山のあなたを走り、原・吉原・浮嶋か原八足の下にありて、妻手を望めは蒲原・由井・沖津の宿々ハそこもさだかにさゝれねど、さつた山の有にまかせてかしこ共思われ、田子の浦辺の響小舟ハ眼にも及ばず、三保の柵原ハほのかに手遊びの金魚鉢にせきしよりの有かごとくミへて、清見が開のあたりを知、表御山の絶景又一段の詠めなり、されど其こゝかしこ案内にも聞、我も覚へる土地のあれバ、足高山の高きも、海づらの白きも知れど、絶上の高眼に望めハ、其凸凹さへもなきかと思われて、富士がねに 見おるす 川や海里も

と、有のまゝなるむだ口言い、妻手へ廻り、又御穴のはしへ出、大日堂を拝す、爰に茶屋ありて、此茶屋御穴のはしにして、雪をつかねて有、是を解して遣ひ水にするとなん、此所表口大宮の登り口な也、しばし茶屋に休らへ、焚火して手足のこごひたるを凌ぎ、立出つ、覆なき諸神・諸仏を拝し行ハ、御山御山水の井有て、茶碗へもりて心まかせの初尾を進む、此御水少し疑ハし、夫より左りへ少しよぎり、又はしごにて登り、西手へ廻り行ハ、向に劔が嶺、此ミねハ御頂上のまた高嶺也、是をなかば登りて谷々を望めハ、足もうき立て詠やることかたし、此嶺へ以前ハ登りぬれど、掛越しの下り口難所にて今ハ登らざるよし、是より少し下り、直に御山水へ出るを内浜通りといふ、」

山さへひくき 一面の原

■史料6

それより御胸付という所をはしごで登り、御穴(火口)の端へ出て、しばらく南へ過ると、賽の河原という所へ出ます。この所は広々とした平地に小さな石を、ここかしこに積んで石塔の形にしています〔あたかも冥途の三途の川にあるという賽の河原のような風景です〕。

この所は〔富士山の〕表山にあたり、左には足高山〔愛鷹山〕があり、伊豆の山々は海面へ乗り出しているようです。大島・小島・三宅島・八丈島などの島々は、海面に浮かんでいるようで、沖を乗行く帆掛船は白々とし〔た帆に風を受けて〕伊豆山の彼方を走り、原・吉原・浮嶋が原はすぐ足の下に見えます。妻手〔右手〕を望めば、蒲原・由井〔由比〕・沖津〔興津〕の宿々は、〔はっきり〕そこ〔だ〕ともさだかに〔指を〕さすことはできませんが、〔海

に迫る〕さつた山〔薩埵山、由比と蒲原を結ぶ薩埵峠で有名です〕が有るのでその辺りかと思われ、〔ましてや〕田子の浦辺の〔駿河湾に浮かんでいる〕蟹小舟〔小漁船〕は〔有るのか無いのか〕眼にも見えません。

〔天女が羽衣をかけたという〕三保の松原は、かすかに手遊びの金魚鉢の中に緑色の石菖藻が生えているように見えて、〔その三保の松原との位置関係から〕清見が開のあたりを知ることができます。〔富士山の〕表〔側の〕御山からの絶景はまた一段〔と素晴らしい〕詠〔眺〕めです。けれども、ここかしこ〔此処彼処、至る所で〕案内にも聞き、私も覚えている土地があり、足高山の高いことも、海面が白く光って見えること〕も知ってはいるけれど、富士山頂上の高眼から望めば、その凸凹さえも無いものと思

われてしまい、富士の高嶺から見おろす川や海里は、〔たとえ平地からは高く見える〕山であろうと低く感じられ、〔まるで〕一面の〔平らな〕原〔のようです〕、と、有のままの無駄な句を詠みたくになります。

妻手〔右手〕へ廻り、また御穴〔火口〕の端へ出ると、大日堂があり、これを拝します。ここに茶屋があります。この茶屋は御穴〔火口〕の端にあるのですが、雪を〔掃き寄せて〕ひとまとめにして置いてあり、これを溶かして遣い水にしているということでした。この所は〔富士山南〕表口の大宮〔静岡県富士宮市の大宮口から村山口を経て登ってくる登山道〕の〔頂上への〕登り口です。しばしこの茶屋で休み、焚火で手足の凍えるのを凌いで出発です。〔途中、雨露を防ぐ〕覆いのない路傍

の諸神・諸仏を拝し行くと、富士山の御山水の井戸〔銀名水でしょうか〕が有って、〔その水を〕茶碗へ盛って心まかせの初尾〔料〕を差し上げますが、この御水は少し疑わしいものです。

それより左へ少し横切り、またはしごを登って西側へ廻って行くと、向いに劔が嶺が見えます。この嶺は、〔富士山の〕御頂上の〔中で〕また〔一番の〕高嶺です。ここをなかば登って谷々を望めば、〔あまりの高さと恐ろしさで〕足も浮き立ち、下を詠〔眺〕める余裕がありません。この嶺へ前は登っていましたが、掛越し〔登り越えた所、という意味でしょうか〕の下り口が難所で、今は登らないとのことです。これより少々下り、直に御山水へ出る道を内浜通りといいます。

博物館 Report

富士山御師外川家に泊まった人々(後-2) - 『富士の道の記』の紹介 -

頂上の風景③ 外浜通りから元の茶屋まで

「この道を右にミテ外浜通り、又少し登り、馬の背のごとき峯を行、谷を望めば屏風を建たるごくなる岩石の細道を過行ハ、誠に鋭のはをワたるごとくにて、ふしむ石ハ焼石にてほつゝ崩るゝなど思ひバ、足のしびれて眼くるめきそのあやうき事いわんかたなし、はるかに谷の中央に有つる御中道の行場、亀岩・夷岩をしばし座して拜し、駿・遠・三の山々を詠めやり、甲の府城の跡などそこ、案内に聞、富士川の流れハ、水元甲府より其末岩洲まで曲り、直横さまの形して白く、と布を敷流せしごとくすべて御山の西ハかゞたる嶮岩にて、屏風をたてるがごとし、さなればこそ登り口なしとかや、夫より少し行、又下りて釈迦のわれ石、此所一、二丈の岩石過行道の上に覆ひ、今もや崩れなるとつむりをかへ、足早に通りに、其岩がほとたゞ落る雪のつららになり、中に八尺に余るあり、是を杖もて打落して咽をしめし、少しく上りてほつといきつぎ、夫より御山水へ下る、此所御山の頂上なれども、少しく窪める所なり、井有て深サ五、六尺水底ハつるべのあたれども、何程くミても尽すとなく、御初尾廿四穴を腰なる瓢に一ぱいいたゞぎ、同行ももてる小陶へ頂ぎ、夫より登り御穴の端へいで、元の茶家へ帰る、凡此御頂上の廻り一里余りあり、同行何れも無事を祝し合、」

■史料7

この道〔内浜通り〕を右に見る道は外浜通りです。また少し登り、馬の背のような峯を行き、谷

を望むと、屏風を立てたような岩石の細道を過ぎ行きます。本当に鋭の刃の上を渡るようで、踏みし

める石は〔火口から噴き出した〕焼石であるので、〔この道は〕少しづつ崩れやすいなど思うと、〔恐怖で〕足がしびれて目まいがするようで、その危うい事といったら、言いようがないほどです。しばしその辺りに座して、はるかに谷〔富士山西側の沢崩れのことでしょうか〕の中央に有る御中道の行場や、亀岩・夷岩を拜し、駿河・遠江・三河の山々を詠〔眺〕めやり、甲府城の辺りなど、その場所、この場所などを案内〔の強力〕に聞きます。

富士川の流れは、水元の甲府あたりから、その〔ずっと下った〕下流の岩洲〔静岡県富士市〕まで、〔川の〕曲り様は真っ直ぐ〔であったり、すぐ〕横に〔くねくねと曲がったり〕様々の形をしており、〔その川面は光を反射して、まるで〕白々と布を敷き流したようです。すべて〔富士の〕御山の西側は峨峨たる嶮しい岩がそびえたち、屏風をたてたようで、そうであればこそ、〔富士山には西側からの〕登り口がないと言われていいます。それより少し行き、また下ると、釈迦の割石〔という場所があります〕。この所は1、2丈〔1丈＝10尺、3～6mほど〕の

岩石が通行する道の上に覆いかぶさり、今にも崩れ落ちそうな様子で、〔皆、手などで〕頭を抱え、足早に通りました。また、その岩からポタポタ落ちる雪がちららになっており、中には1尺〔30.3cm〕以上のものもありますので、これを金剛杖で打ち落して咽をしめし、少し上った所でほと一息入れました。

それより御山水〔金名水〕へ下ります。この場所は御山の頂上ですが、少し窪んだ所です。井戸が有って、深さ5、6尺〔約1.5～1.8m〕で水底に釣瓶が当たる位ですが、いくら汲んでも尽きることがないそうです。ここに御初尾24穴〔24文〕を奉納し、私は腰の瓢箪に一杯の水をいただき、同行〔の佐野の富士講の人々〕も持参の小徳利へ頂戴します。それからまた登りにかかり、御穴〔火口〕の端へ出て、元の〔北口から登ってきた〕茶屋へ帰ってきました。およそ、この御頂上の廻り〔御鉢廻りともいいます〕は1里余り〔約4km程〕あり、同行6人一同は何れも無事を祝い合いました。(次号につづく)

※『富士の道の記』は新潟大学附属図書館佐野文庫の所蔵です。
※〔原文に付されたルビは、煩雑ですが、そのままとしました。〕

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

- 開館時間 / 午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)
- 休館日 / 火曜日(祝日を除く)、
祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始
- 観覧料 / 大人 300円(団体240円)
小中高生 150円(団体120円)
- 交通案内 / ●中央自動車道河口湖 ICより車で10分
●東富士五湖道路山中湖 ICより車で10分
●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005
山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8
TEL 0555-22-1101
観覧料 / 大人 100円(団体80円)
小中高生 50円(団体40円)
※博物館・富士山レーダードーム館のチケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● http://www.fy-museum.jp E-mail ● hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成24年10月31日 印刷/K2・ONE